

未来への伝承

花火プログラムが伝わったわけ

土浦で花火競技大会が始まった当初、大正15(1926)年から昭和11(1936)年まで一今から約90年前の煙火打揚番組表(プログラム)8年分、8枚を博物館で収蔵しています。

プログラムはさまざまなことを教えてくれます。第2回大会(大正15年)には全国から花火師が集まったこと、花火玉には世相を反映する名がつけられたこと、銀行、料亭などの商店が大会に広告を出したこと。花火師の数と出身県が次第に広がっていったことも数年分のプログラムを比較するとわかります。これらのプログラムがなかったら、開始当初の様子はほとんど明らかになりません。

プログラムは花火の添え物で、花火が済めば、その多くは捨てられてしまいます。古いプログラムが古本屋に売られていることも、ほとんどありません。

8枚のプログラムは、長野県長野市の花火製造業者、青

木煙火店が持つていてくれました。青木煙火店は屋号を紅屋といい、初代儀作が花火作りを始め、花火製造の盛んな長野県を代表する花火師でした。土浦の大会には開始当初から出品し、優秀な成績を収めました。このため、プログラムを大切に保存していたのでしよう。

昭和47(1972)年3月、儀作の子、二代多門は、土浦火工株式会社を経営していた北島義一(1908〜79)にプログラム8枚を送ってきました。一通の手紙(資料)が添えられていました。

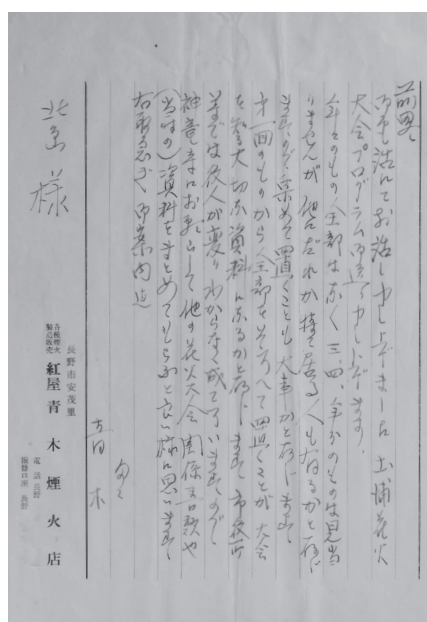
北島義一は黒子村(筑西市)に生まれ、土浦の花火大会の創始者、神龍寺住職秋元梅峯(1882〜1934)に請われ、父文三郎(1887〜1952)とともに土浦に移り住み、昭和20(1945)年、大和町に土浦火工株式会社を設立しました。戦後、全国に先駆けて花火大会を復活させ、昭和38(1963)年、通商産業大臣賞の授与にも貢献

しました。義一は若い頃、長野市に儀作を訪ね、花火技術を学んだといっています。

多門の手紙は要点が的確です。「大会を知る大切な資料になる」とプログラムの重要性を指摘し、「資料をまとめてもらふと良い」と保存の必要性を伝えました。

義一は優勝トロフィーや盾などは人にあげてしまったと遺族が語っています。さっぱりした気質でモノに頓着しなかったのでしょうか。しかし、多門のアドバイスには従い、プログラムを守り伝えました。義一亡き後、土浦火工を継いだ川畑宏一さんが平成4年に市立博物館に寄贈しました。資料を保存することの重要性が受け継がれた結果、わたしたちは初期のプログラムを見ることができるのです。

関市立博物館(☎824・2928)



▲資料「北島義一への手紙」

前略

お電話にてお話し申し上げました土浦花火大会プログラム御送り申し上げます。年々のもの全部はなく、三、四年分のものは見当たりませんが、他にだれか持っている人も有るかと思存しますので、集めて置くことも大事かと存じます。第一回のものから全部をそろへて置くことが、大会を知る大切な資料になるかと存じます。市役所等では役人が変わリわからなく成てしまいますので、神竜寺にお願ひして他の花火大会関係書類や(当時の)資料をまとめてもらふと良い様に思います。右取り急ぎ御案内迄。

北島様

(原文のまま)

匆々
青木

※この手紙は5月6日(日)まで土浦市立博物館開館30周年記念特別展「花火と土浦Ⅱ―祈る心・競う技」で展示しています。